



言語聴覚士
×
70代女性

STORY_3

言葉を取り戻せば、日常が戻る。

田井良宏

篠田総合病院 言語聴覚士

東北文化学園大学 リハビリテーション学科言語聴覚学専攻2014年卒(山形県立谷地高等学校出身)

病 気やケガなどで、話すことや聴くことが難しくなった人をリハビリで回復するスペシャリスト 田井良宏。接する人には、脳卒中などで言葉を失った高齢者が少なくない。79歳のせつ子さん(仮名)も、脳出血によって言葉を話せなくなった。声は出ているが、何を話しているのかわからない。日常生活に戻ったとき、まわりの人とやりとりがスムーズにできるように、簡単な会話ができるレベルを目標にした。トレーニングはほぼ毎日40分から1時間ほど行う。言語聴覚室のテーブルに動物などが描かれたカードを並べ、田井が伝えた内容をカードの中から選ぶトレーニングだ。せつさんは、話す、聴く、読む、書くのなかでも、聴いて理解することが難しくなっていた。たとえば、「船」と伝え、船のカードを選ぶまで何度も繰り返す。カードよりも身近なものの写真が楽しいのではと、カメラで本人の歯ブラシやコップを撮った写真を使ったこともある。少しずつ言葉が戻ってきたころ、せつさんははじめて田井に自分の要望を伝えた。「まんじゅう食べたい」。まんじゅう？手元に、まんじゅうはない。田井はティッシュをまるめて手の中に包み、彼女の手には「はい、まんじゅう」と言って渡した。「なにバカなこと言ってんだ、って顔で笑ってました」。祖母と孫のような感覚だったという。仲良くなってリハビリは進んだが、甘えも出てくるようになった。トレーニングで、せつさんがふざけて答えないことが続く。田井は反省した、距離が近くなりすぎた、と。空気を少し引き締め、「これだけは今日やろう」と、その日、その日の目標を示すようになった。リハビリの成果は上がり、冗談を言いあえるくらいにまで回復した。退院当日、息子に車いすを押してもらい、せつさんは田井のもとへやってきた。「会ってきたかったんだ。ありがとな」。こぼれる涙を息子がふいている。田井も涙をこらえきれなかった。一緒に乗り越えた経験が、いまでも田井をリハビリに向かわせる原動力になっている。



文字を理解し、行動に移す訓練も楽しい雰囲気



パズルで集中力を高め、リハビリは明るく楽しく